熊野の歴史

（研究ノート・第５号）

目　次

一、熊野筆生産の全国的地位　……　佐中忠司　（3）
二、資料A　中国の筆　……　（51）
三、資料B　熊野筆に関する資料　……　（67）
四、付表　一～八　……　（77）

一、熊野筆生産の全国的地位

佐中忠司

A　広島県における筆の生産の移り変わりと熊野筆

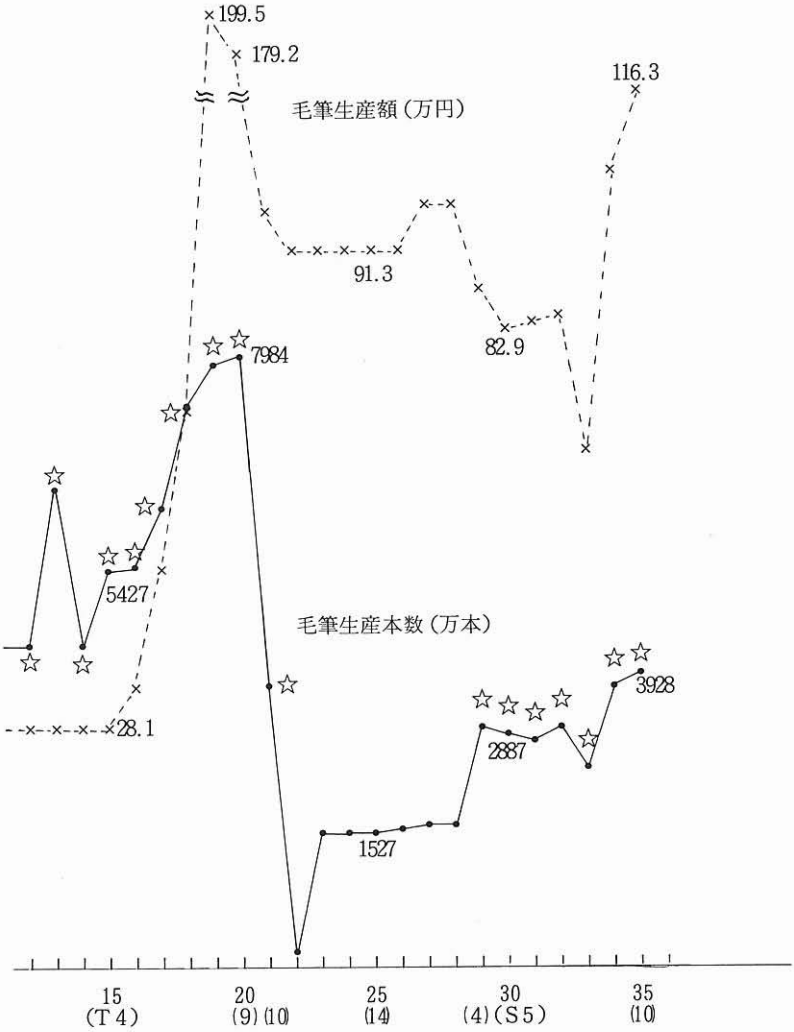
(1)　広島県勧業統計表による筆の生産量の推移（戦前）

広島県内での毛筆の生産は、戦後においては、熊野町と川尻町でのみみられる。両町は、単に、県下における二大産地であるばかりでなく、愛知県豊橋市や奈良市と並んで、全国的な生産地である。ところで、このような両町への毛筆生産の集中は、歴史的にはいつごろから、みられるようになったのであろうか。

広島県勧業統計表によれば、その様子をほぼ類推することができるであろう。図一～二によると、明治一九年（一八八六）から昭和一〇年（一九三五）までの、五年ごとの広島県内における熊野筆の生産とその県内にしめる比重とが、分かる。安芸郡には、焼山村（昭和六年呉市へ合併）における毛筆の生産も含まれているが、それはごく少量である。

熊野における毛筆の生産は、毛筆生産が盛んとなる明治の二〇年代から、県内の圧倒的なシェアーを占めている。この間最高八、〇〇〇万本（四、〇〇〇万対）にせまる生産量が記録されている。県下にしめるその比重も常に七割以上、大体九割前後のところを上下している。

毛筆生産の額では、全国的に慢性的不況の時期（明治四〇年ごろから大正四年ごろ）と、第一次世界大戦（大

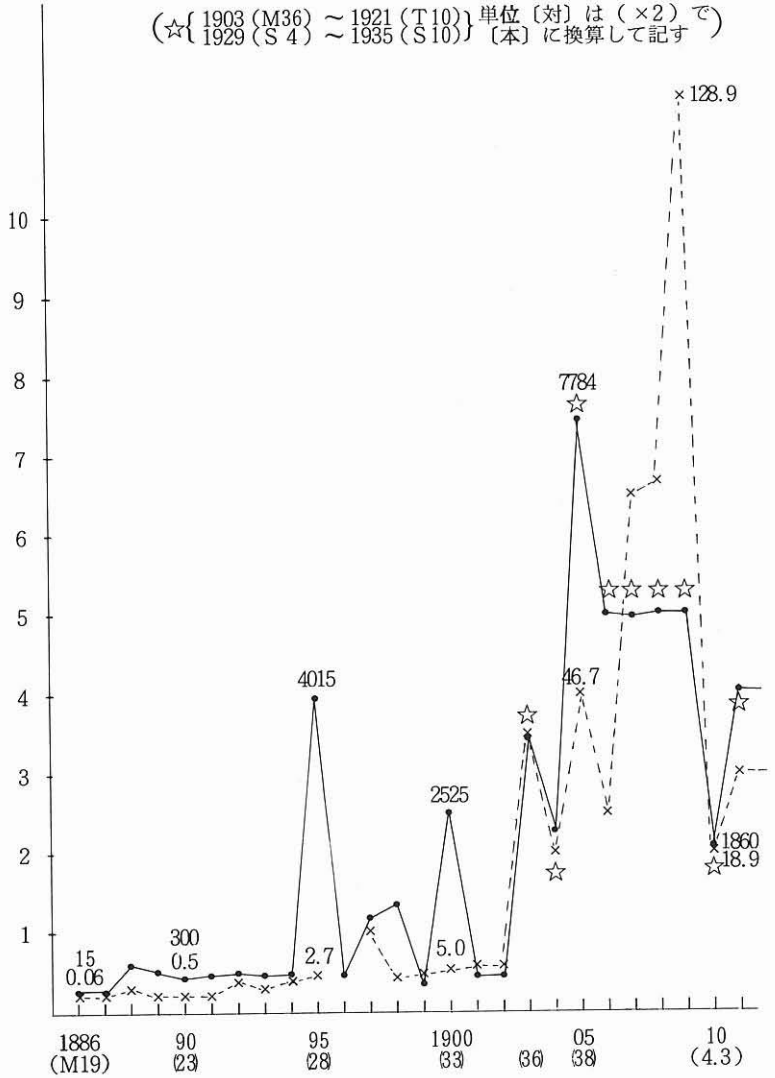


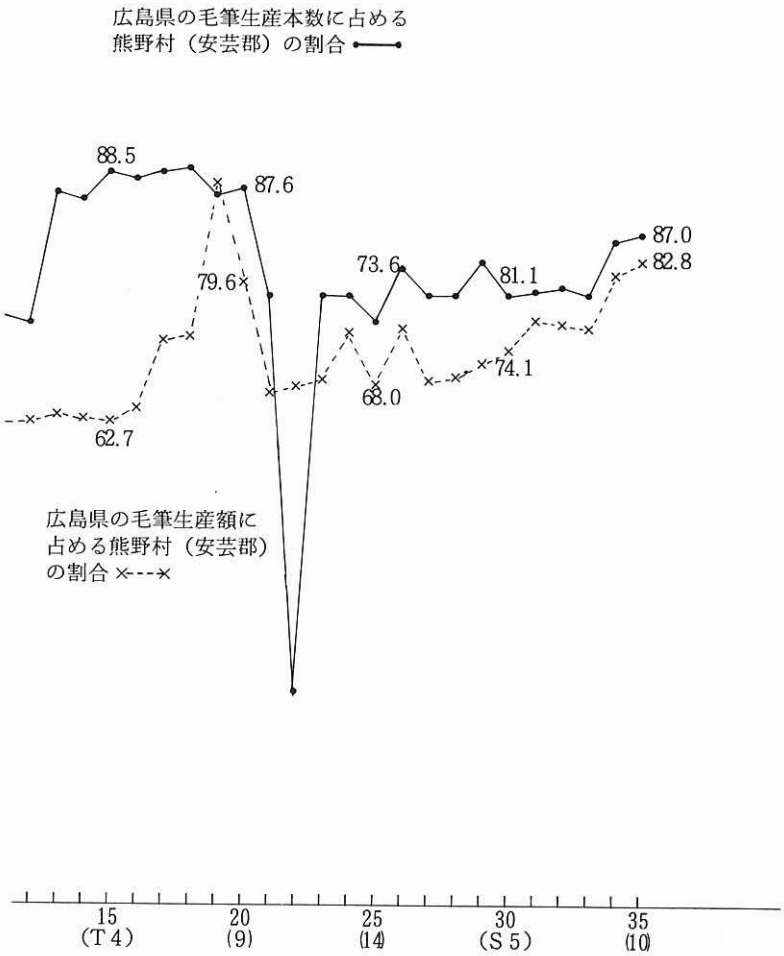
（広島県勧業統計より作成）

図1

熊野村（安芸郡）の毛筆生産本数及び生産額

（☆{1903（M36）～1921（T10）}{1929（S4）～1935（S10）}単位〔対〕は（×2）で〔本〕に換算して記す）

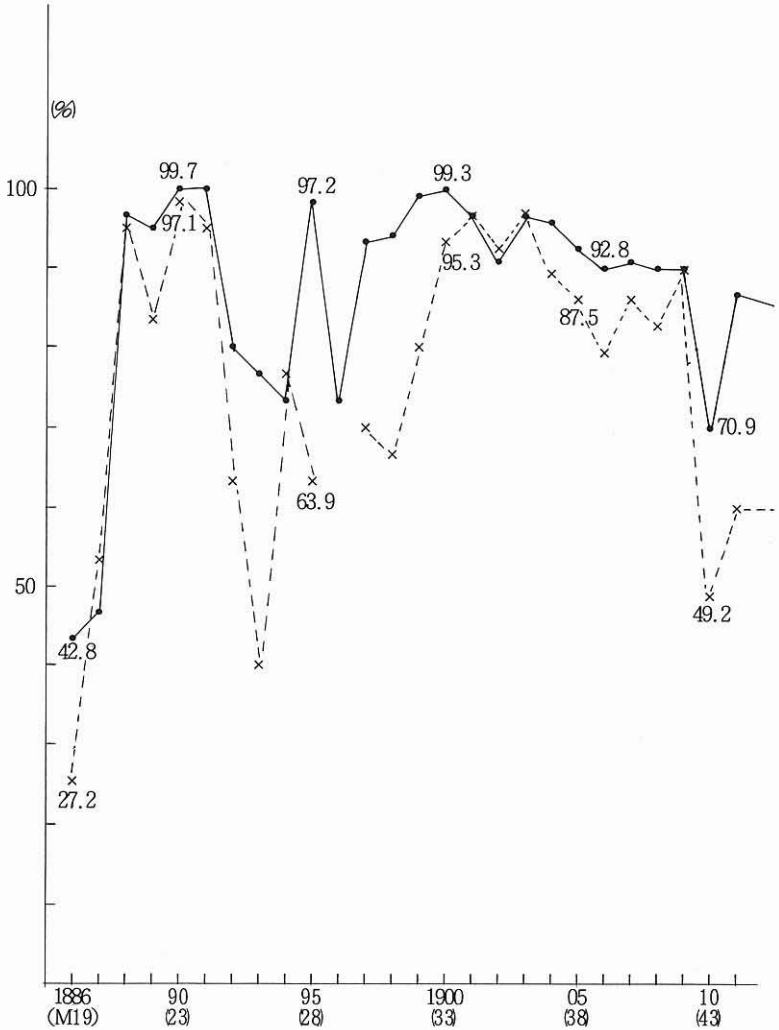




（広島県勧業統計より作成）

図 2

熊野筆が広島県内の毛筆生産に占める割合



正三年 ― 同七年（一九一四 ― 一九一八））ののちの戦後恐慌以降の慢性的不況状況下、昭和恐慌（昭和五年（一九三〇）開始）にいたる間に、大きな落ち込みがみられるが、全体としては伸びている。ただ、広島県内にしめる熊野筆の生産額のしめる比重は、年によって大きく変動している。ごく大づかみにいえば、大体、六割ないし七割程度のシェアーを占めていたといってもよいかも知れない。

(2) 広島県勧業統計表による職工数の推移（戦前）

嘉永年間に熊野における筆の職工は一〇人、明治元年同八〇人という記録が伝えられている。広島県勧業統計表によると、県内の毛筆生産にたずさわった人びとの推移は、図三に示されているとおりである。

熊野村の毛筆製造戸数は、日清争戦（明治二七～二八年）後から急速な増加をみせる。熊野村統計報告事跡綴によると明治三一年（一八九八）には、六三〇戸、一、〇五〇人とあり、このころから一、〇〇〇人台の人々が筆造りにたずさわっていたことになる。その後、ほぼ順調な推移をたどる。

第一次世界大戦中の大正五年（一九一六）には、突発的に一、三四九戸、三、七一七人に増加するが、その後大正九年（一九二〇）まで大体七〇〇～八〇〇戸、二、〇〇〇人台が続く。大正一〇年には製造戸数が一、二〇五戸と一、〇〇〇戸の大台にのり（但し、この年職工数は一、七八〇人に減少）、翌大正一二年からは一、二〇〇～一、四〇〇戸台に推移する一方で、職工数も三、〇〇〇人台で、しだいに四、〇〇〇人に近づく勢いをしめしている。

熊野の筆生産にたずさわる職工の数は、県内の職工総数のつねに圧倒的な部分をしめている（大体八割から九割五分）。これが、まず第一の特徴である。つぎに、一戸当の職工数をみると大体一人～三人以内にとどまってい

る。さらに、職工のうち、熊野の場合女性が多いことも大きな特徴である。大体三分の二以上は女性である。このように、熊野筆は、小規模な家内労働とくに女性労働によって造られてきたという点に、重要な特徴がみられる。県内外のその他の毛筆産地では、当時も戦後の現在においても、女性の職工の比重はそれほど大きくはないとされている。まさに、「姉も妹も筆つくる」と唄われているように、熊野の筆づくりは、その大部分が、零細な家内工業、とりわけその女性労働によって、ささえられてきたといってよいであろう。

(3) 県内の他の毛筆産地の状況

熊野以外の県下の毛筆生産地は、図五によると、広島市ついで川尻村であった。広島市における毛筆の生産は明治三〇年代の末ごろから大正の中葉（大正一〇年）ころまでが、いちばん盛んであったようで、それ以降じょじょに衰退していく。明治以降、広島市における毛筆生産の戸数は多くて三〇戸どまり、たいていは一〇戸以下である。職工数は最高四〇〇人までで、たいていの年は二〇〇人台どまり。生産量は多くても一、〇〇〇万本までで、たいていは四〇〇～五〇〇万本程度、生産額は最高四〇万円を超えることなく、だいたい一〇～二〇万円台を推移している（後掲の付表も参照）。

これに対して、賀茂郡（川尻村、同村は大正一一年町制施行、昭和三一年に豊田郡へ移管）では、明治の末期ごろから毛筆造りが本格的に定着したもののように思われる。広島県勧業統計に川尻村の毛筆生産がはじめて現われるのは、明治二五年（一八九二）である。同年六四戸（六六人）の生産者があり、一三万二〇〇〇本、三、九六〇円の生産額が記録されている。広島市における毛筆の生産との対比でみると、当時の川尻筆の生産の規模は、

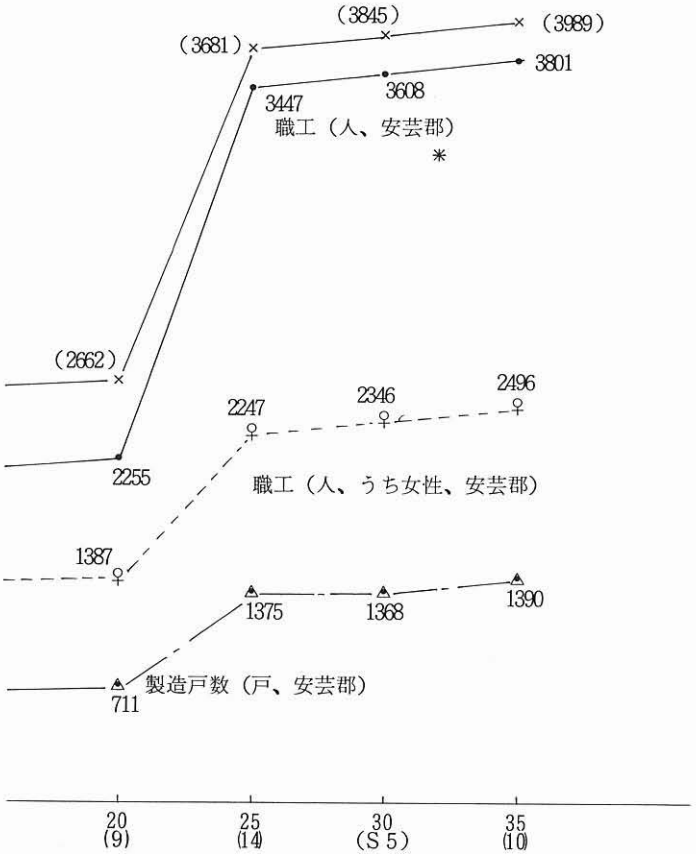
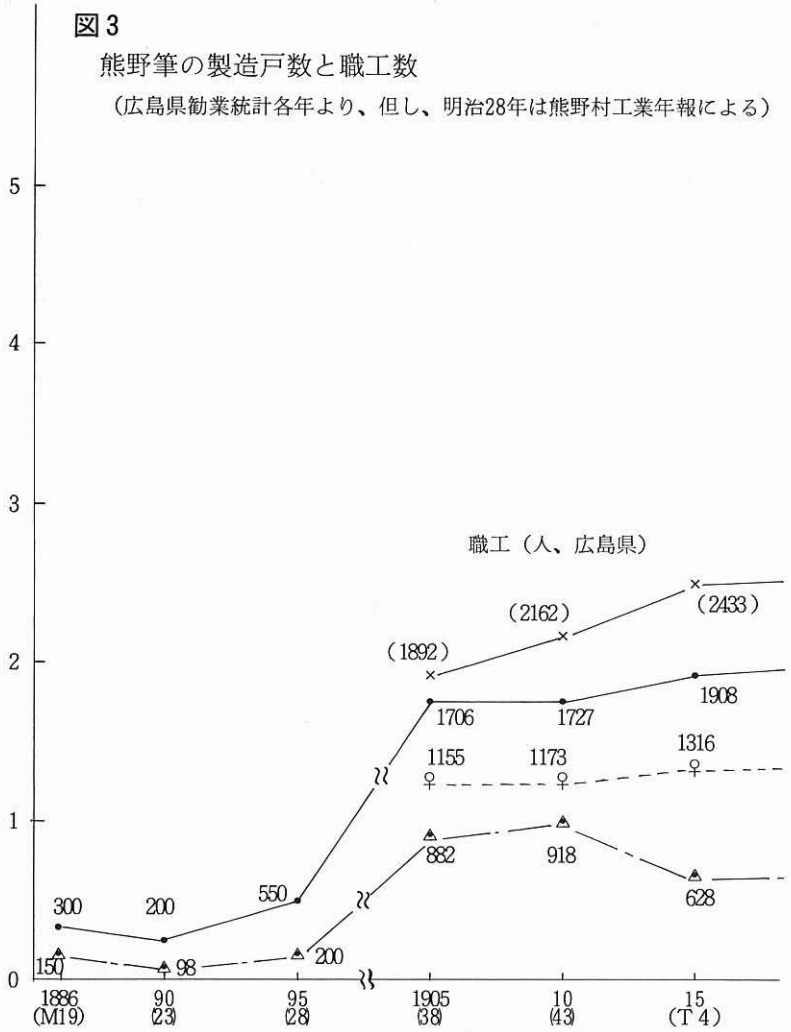

(3845)
(3989)
(3681)
3801
3608
3447
職工（人、安芸郡）
(2662)
2496
2346
2247
2255
職工（人、うち女性、安芸郡）
1387
1390
1375
1368
製造戸数（戸、安芸郡）
711
20
(9)
25
(14)
30
(S 5)
35
(10)

図3

熊野筆の製造戸数と職工数

（広島県勧業統計各年より、但し、明治28年は熊野村工業年報による）



＊ 焼山村（昭和６年呉市へ合併）を含む。

図 4

毛筆製造における男子職工の割合

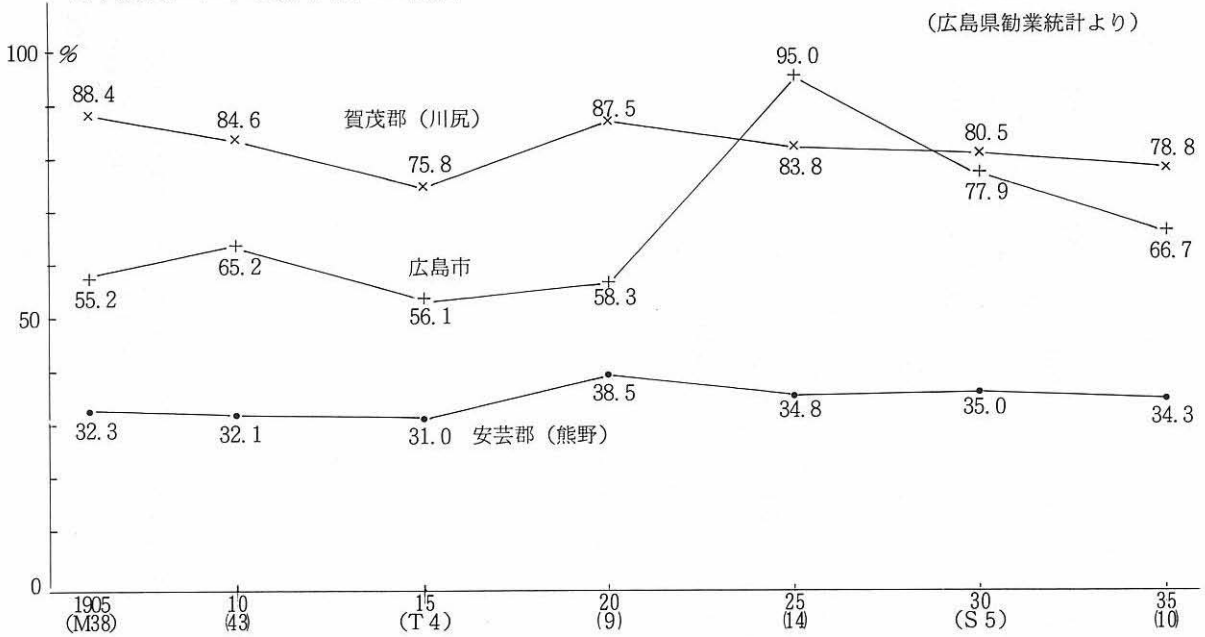


表1

職　工　数　の　推　移

（広島県勧業統計より）

	広島			安芸			賀茂		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
1905年 (M38)	58 (55.2)	47 (44.8)	105 (100.0)	551 (32.3)	1,155 (67.7)	1,706 (100.0)	69 (88.4)	9 (11.6)	78 (100.0)
1910年 (43)	150 (65.2)	80 (34.8)	230 (100.0)	554 (32.1)	1,173 (67.9)	1,727 (100.0)	170 (84.6)	31 (15.4)	201 (100.0)
1915年 (T4)	235 (56.1)	184 (43.9)	419 (100.0)	592 (31.0)	1,316 (69.0)	1,908 (100.0)	50 (75.8)	16 (24.2)	66 (100.0)
1920年 (9)	141 (58.3)	101 (41.7)	242 (100.0)	868 (38.5)	1,387 (61.5)	2,255 (100.0)	140 (87.5)	20 (12.5)	160 (100.0)
1925年 (14)	57 (95.0)	3 (5.0)	60 (100.0)	1,200 (34.8)	2,247 (65.2)	3,447 (100.0)	145 (83.8)	28 (16.2)	173 (100.0)
1930年 (S5)	53 (77.9)	15 (22.1)	68 (100.0)	1,262 (35.0)	2,346 (65.0)	3,608 (100.0)	120 (80.5)	29 (19.5)	149 (100.0)
1935年 (10)	28 (66.7)	14 (33.3)	42 (100.0)	1,305 (34.3)	2,496 (65.7)	3,801 (100.0)	115 (78.8)	31 (21.2)	146 (100.0)

（広島県勧業統計より）

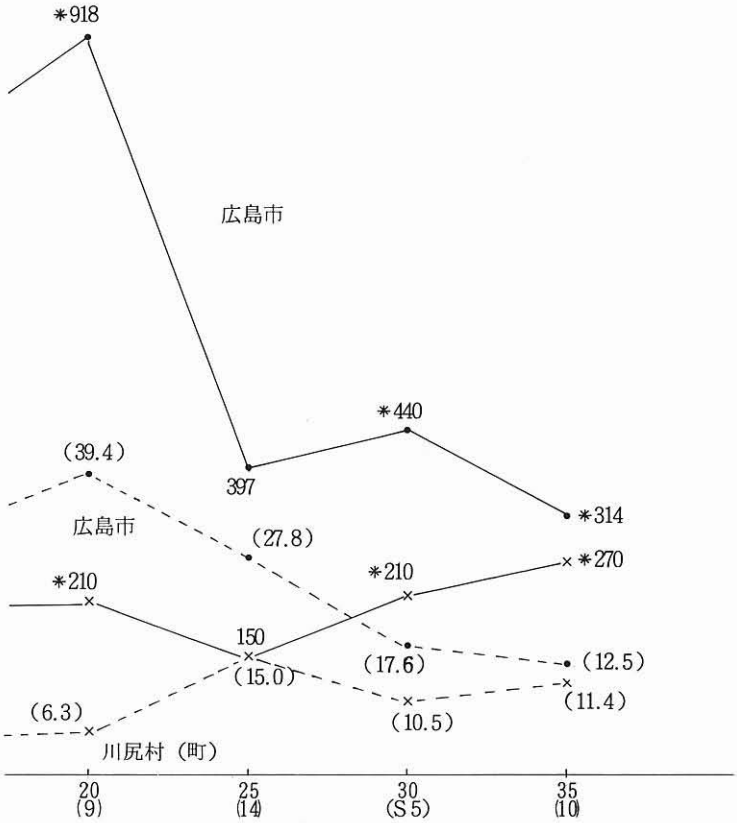
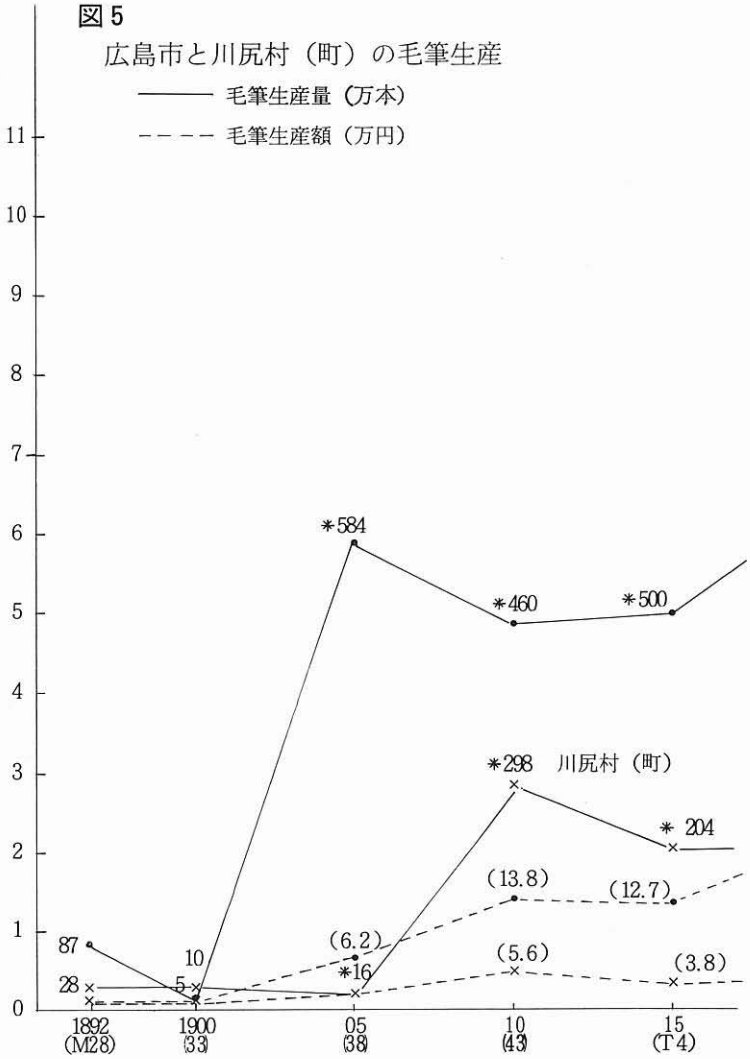

＊918
広島市
397
＊440
＊314
（39.4）
広島市
（27.8）
＊210
＊210
150
（15.0）
（17.6）
（12.5）
＊270
（11.4）
（10.5）
（6.3）
川尻村（町）
20
（9）
25
（14）
30
（S5）
35
（10）

図5

広島市と川尻村（町）の毛筆生産



＊印　対を本に換算

賀茂郡		その他	
		西城村 10,000 (0.3) 150 (2.9)	
本 285,167 (0.7)	円 4,678 (11.0)	世羅郡 8,000 (0.02) 90 (0.2)	双三郡 10,000 (0.04) 70 (0.1)
本 100,000 (0.4)	1,500 (2.8)	世羅郡 1,000 (0.003) 15 (0.03)	双三郡 1,500 (0.003) 30 (0.005)
(対) 82,130 (0.2)	3,860 (0.7)	深安郡 22,500 (0.05) 920 (0.2)	双三郡 2,700 (0.02) 102 (0.02)
(対) 1,494,300 (11.4)	56,567 (14.7)	深安郡 20,000 (0.2) 450 (0.1)	双三郡 1,450 (0.004) 73 (0.01)
(対) 1,021,320 (3.3)	38,986 (8.7)	安佐郡 2,000 (0.006) 60 (0.01)	福山市 8,000 (0.01) 800 (0.03) 佐伯郡 300 (0.00) 24 (0.00)
(対) 1,050,000 (2.3)	63,000 (2.8)	安佐郡 3,750 (0.008) 300 (0.01)	福山市 19,000 (0.09) 1,140 (0.08)
本 1,500,000 (7.2)	150,000 (11.2)		山縣郡 2,000 (0.01) 200 (0.01)
(対) 1,050,000 (5.9)	105,000 (9.4)	尾道市 102,500 (0.6) 8,200 (0.7)	
(対) 1,350,000 (6.0)	114,750 (8.2)		

表2

広島県の毛筆生産

	合計		安芸郡		広島市	
1886年(明治19)	本 350,440 (100.0)	円 2,204 (100.0)	本 150,000 (42.8)	円 600 (27.2)	本 200,440 (57.2)	円 1,604 (72.8)
1890年(明治23)	本 3,010,000 (100.0)	5,150 (100.0)	本 3,000,000 (99.7)	5,000 (97.1)		
1895年(明治28)	本 41,314,167 (100.0)	42,440 (100.0)	本 40,145,000 (97.2)	27,160 (64.0)	本 876,000 (2.1)	10,512 (24.8)
1900年(明治23)	本 25,420,400 (100.0)	53,176 (100.0)	本 25,250,000 (99.3)	50,700 (95.3)	本 59,400 (0.2)	891 (1.7)
1905年(明治38)	(対) 41,948,130 (100.0)	533,874 (100.0)	(対) 38,922,000 (92.8)	467,064 (87.5)	(対) 2,920,000 (7.0)	62,000 (11.6)
1910年(明治43)	(対) 13,119,738 (100.0)	383,994 (100.0)	(対) 9,302,738 (70.9)	188,875 (49.2)	(対) 2,300,000 (17.5)	138,000 (35.9)
1915年(大正4)	(対) 30,662,370 (100.0)	447,123 (100.0)	(対) 27,137,600 (88.5)	280,504 (62.7)	(対) 2,500,000 (8.2)	127,500 (28.5)
1920年(大正9)	(対) 45,567,110 (100.0)	2,250,217 (100.0)	(対) 39,915,060 (87.6)	1,792,093 (79.6)	(対) 4,590,000 (10.1)	394,000 (17.5)
1925年(大正14)	本 20,764,771 (100.0)	1,342,895 (100.0)	本 15,273,200 (73.6)	913,075 (68.0)	本 3,972,571 (19.1)	278,000 (20.8)
1930年(昭和5)	(対) 17,791,400 (100.0)	1,118,585 (100.0)	(対) 14,436,900 (81.1)	829,185 (74.1)	(対) 2,200,000 (12.4)	176,000 (15.7)
1935年(昭和10)	(対) 22,566,200 (100.0)	1,403,607 (100.0)	(対) 19,641,400 (87.0)	1,162,873 (82.8)	(対) 1,574,800 (7.0)	125,984 (9.0)

生産戸数は一〇〇戸前後で広島市のそれよりはるかに多く、職工数は一〇〇～二〇〇人程度でほぼ同数である。また、生産量は、明治四一年（一九〇八）の二五〇万対（五〇〇万本）を最高に、だいたい一〇〇～二〇〇万本台で、広島市のそれのたかだか半分程度であったものと思われる。さらに、生産額は、数万～一〇数万円の程度で、広島市のそれのおおむね半分程度にとどまっている。しかし、川尻村（町）における毛筆の生産は、広島市の場合とほぼ同じ明治三〇年代末ごろから本格化したとみられるが、それ以降かなり安定した生産規模の推移がみられるのが特徴である。そして、広島市における毛筆生産が衰退しはじめる大正末期からは、川尻の職工数は広島市のそれを凌駕する。

その他にも県内での毛筆の生産は、各地で散発的に行なわれていたもようである。たとえば、わずかづつではあるが、明治期には、西城村、世羅郡、双三郡、深安郡内にも記録がある。大正期以降には、さらに、安佐郡、尾道市、福山市、佐伯郡、呉市、山縣郡内でも、その記録がみられる。しかし、これらの各地域は、いずれもごく少人数で、期間もせいぜい数年間しか記録が残されていない。

B　他産地の筆と全国的状況

(1)　全国における筆の生産量の推移（戦前）

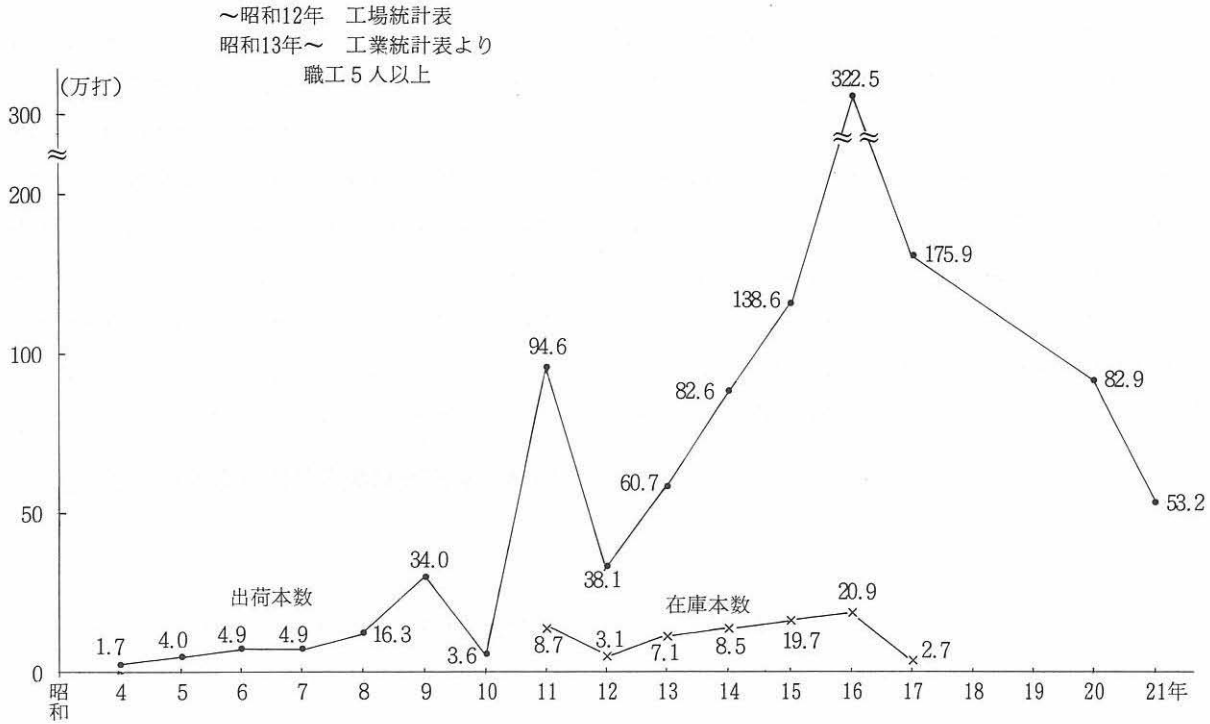
毛筆の生産状況についてのまとまった統計は、全国的には、充分なものがみあたらない。工業統計（工場統計を改称）表によってある程度その様子をうかがい知る程度である。工業統計は、あらゆる製造業種にわたる膨大な調査であり、その中にしめる毛筆業の比重は、ほとんど無視されうるほどのものである。全産業にわたって職工五人以上の事業所が取り上げられている。ところが、毛筆業は、零細な家内工業がその主体をなしているのであり、この統計にもれている部分にこそ、その実態がかくされているといっても過言ではないのである。したがって、ここに紹介される筆の生産量は、職工五人以上のこの業界としては比較的大規模な事業所に関するものであることを留意してほしい。

毛筆の生産量(本数)は、昭和四年までさかのぼることができる（図六）。筆の単位は、通常、対（つい）か本であるが、工業統計では、他の文具類と一緒にされているために、打（ダース）となっている。昭和一〇年代に、生産本数が飛躍的に増加し、大平洋戦後への突入（昭和一六年）とともに、急激に減少している。

地域的には、昭和一〇年ころまでは、ほとんどが大阪府下で生産されており、他にも愛知が若干みられるのみ

図6

毛筆の全国生産量と在庫本数（戦前）



である。一〇年代には、広島、新潟、東京他がこれらに加わってゆく。昭和一五、一六年ごろの生産量の飛躍は主に大阪、新潟、東京方面における生産量の増大によっている。

毛筆の生産額については、かなり古くまでさかのぼることができる(図七・八)。昭和一二年までは、第一次世界大戦や大正後期の活況状況と戦後不況・金融恐慌（昭和二年）や大恐慌（昭和四～六年）時の落ち込みがみられる。昭和一〇年代には、インフレーションによる物価の騰貴も作用してか、生産額は戦争ムードの高まりにつれて、急速に上昇しつづけた。

毛筆生産の地域的分布の推移は、めまぐるしく変動している(図九・一〇)。明治・大正期には、福岡、熊本、三重などのしめるウェイトも大きかった。昭和に入ってからは、大阪に集中し、同一〇年前後から新潟や愛知、広島などがこれにつづいてゆく。毛筆の生産は、戦前期においてはこのように、全国各地でそれぞれに生産されていたことが知れるのである。広島は、戦前の時期までは、せいぜい一～二割程度の全国シェアーを持つにすぎなかった。

(2) 生産量の推移と地域的分布（戦時期）

昭和一〇年代は、毛筆の生産が急激に活発化していった時期である。この時期は、世界大恐慌（昭和四、五年）後の「満州事変」（昭和六年）などをはじめとして、その後あいついで日本が大陸への軍事的・経済的侵出を展開してゆく時期である。すなわち、昭和一二年の日中戦争、昭和一六年の大平洋戦争と日に日に、戦時体制が強化され、国の内外において、政治的・軍事的緊張が強化され、経済的統制もきびしさを加えてゆく。

この時期の工業統計は、これらの事情を反映して、担当の部局が短期間のうちにめまぐるしく交替している。

図7

毛筆の全国生産額(1)

（職工５人以上の事業所、工場統計表各年より）

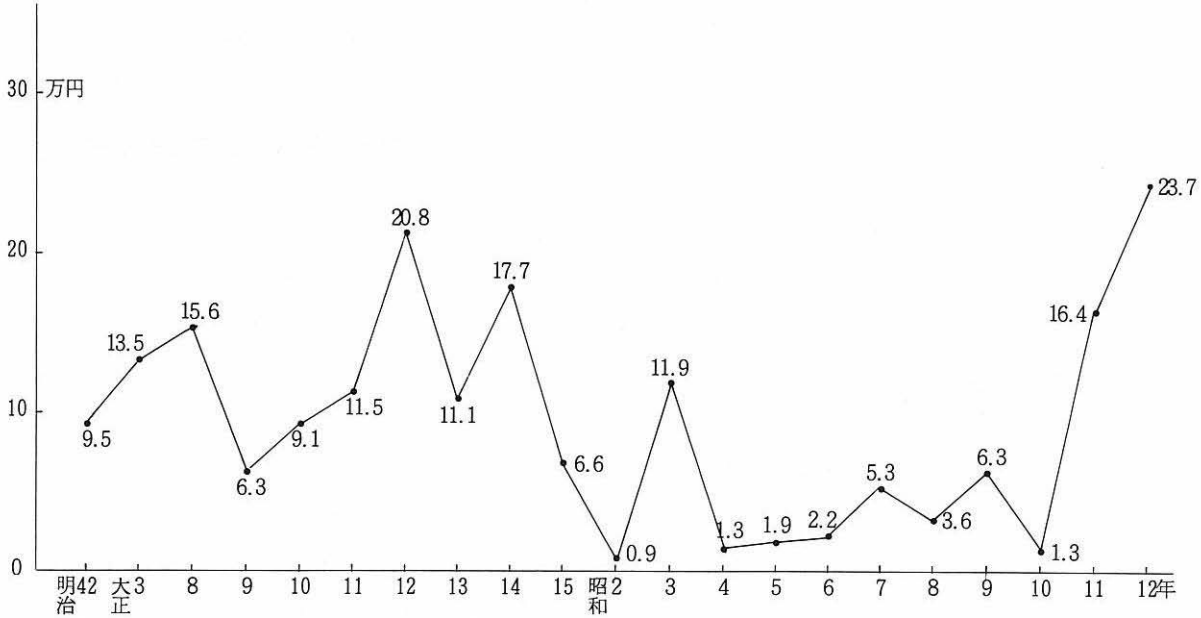
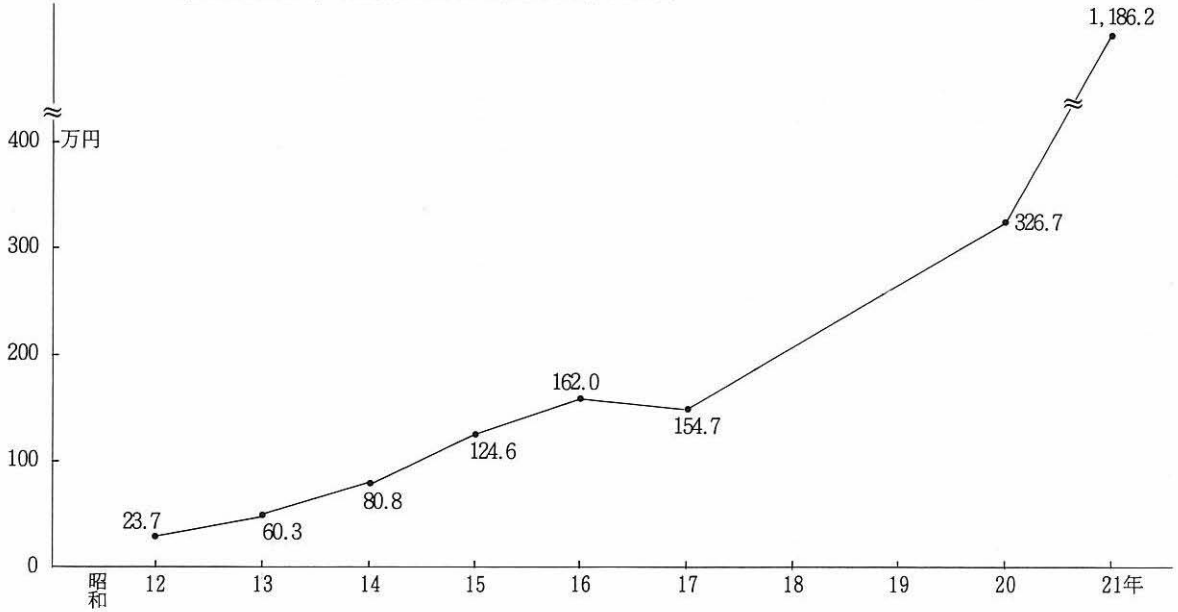


図8

毛筆の全国生産額(2)

職工5人以上の事業所
(工場統計表(～昭12)、および工場統計表各年より)



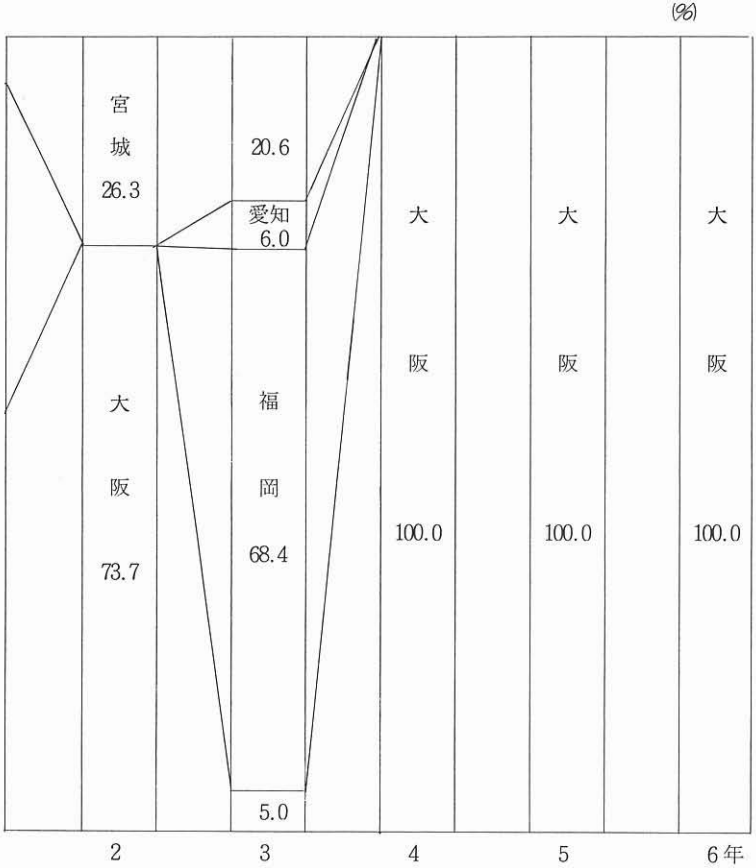
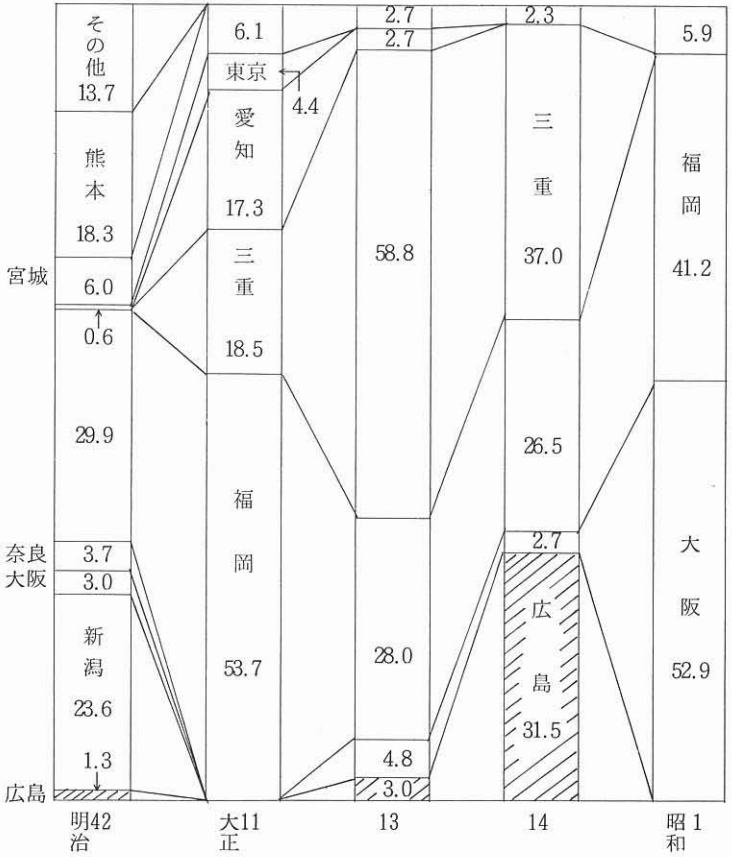

(%)
宮
城
26.3
大
阪
73.7
20.6
愛知
6.0
福
岡
68.4
5.0
大
阪
100.0
大
阪
100.0
大
阪
100.0
2
3
4
5
6年

図9

毛筆生産額の地域的分布(1)

(工場統計表より)

従業員5人以上



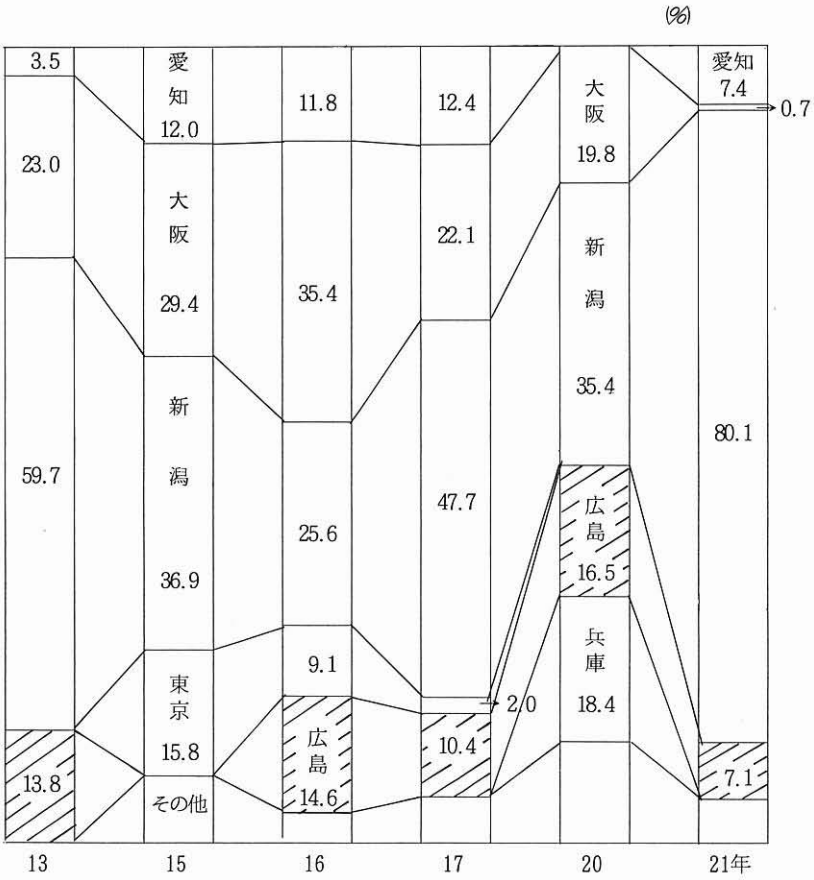
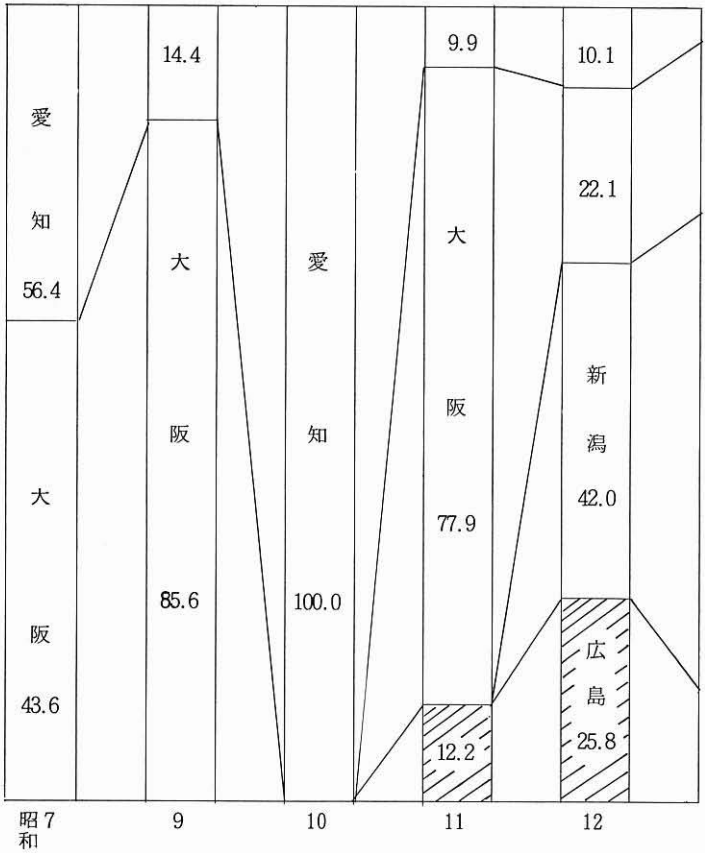

(%)
3.5
23.0
59.7
13.8
愛知
12.0
大阪
29.4
新潟
36.9
東京
15.8
その他
11.8
35.4
25.6
9.1
広島
14.6
12.4
22.1
47.7
2.0
10.4
大阪
19.8
新潟
35.4
広島
16.5
兵庫
18.4
愛知
7.4
0.7
80.1
7.1
13
15
16
17
20
21年

図10

毛筆生産額の地域的分布(2)

～昭和12年　工場統計表
昭和13年～　工業統計表より

従業員５人以上



すなわち、担当の部局は、商工省総務局調査課が大正一三～昭和一六年まで、軍需省総動員局動員部第三課が昭和一七年、商工省調査統計局が昭和二〇～同二一年までとなっている。戦時色の国民生活のあらゆる分野への広がり、経済的統制の強権的強まりの中で、工業統計は国家の重要な機密と考えられていた。そのような状況のもとでの毛筆生産の資料であるから、その実態がどれほど正しく反映されているかは、必ずしもさだかではない。

しかし、戦略上の理由からも、この時期の調査は、きわめて多方面にわたって詳細な項目をひろいあつめているという点では、他の時期にみられない特徴がある。ここでは、職工五人未満の事業所も調査対象とされているために、毛筆生産事業の実態を把握する上では、かえって好都合であると思われる。毛筆関係についての統計も、昭和一四～一七年にわたっては、詳しく掲載されている。

全国における毛筆の生産額と生産量は、図一一に示されているとおりである。この間、職工五人未満の事業所での生産本数は、大体一〇〇万ダース程度、同五人以上の事業所ではほぼ一〇〇～三〇〇万ダース、合計して、毎年二〇〇～四〇〇万ダース（本数に換算すれば、二、四〇〇～四、八〇〇万本に相当）程度の生産量であり、金額的にはだいたい二〇〇～三〇〇万円程度ということになる。しかしこの程度の生産量は、この間の熊野筆の生産量（同組合調）にも達していない。

もちろん、それぞれの統計資料における数値は、その目的や調査の基準、条件等によって相違することはさけがたい。したがって、いずれの数値が正しく、いずれが誤りであると単純にきめつけることはできない。

毛筆の生産量の全国的な分布は、図一二・一三に示されている。職工五人以上の事業所による生産量は、とくに新潟県や大阪府で集中的にみられる。同五人未満の生産量は、愛知県と東京都で集中度が高くなっているように思わ

図11

毛筆の生産量・生産額

（全国）

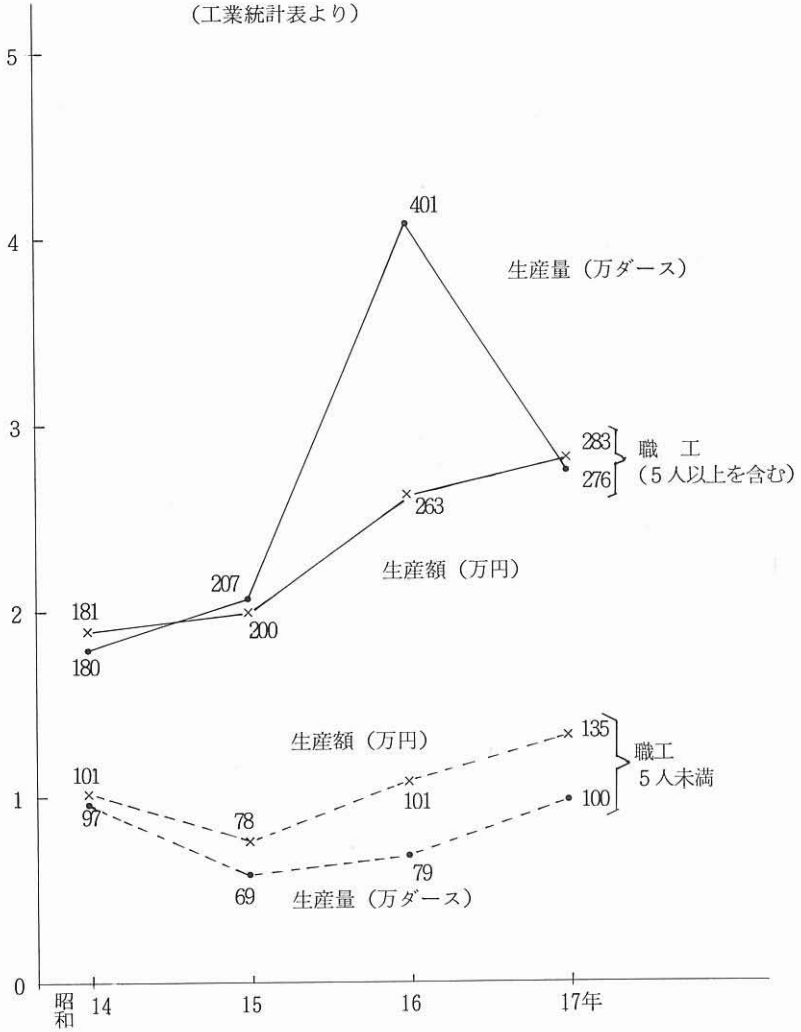
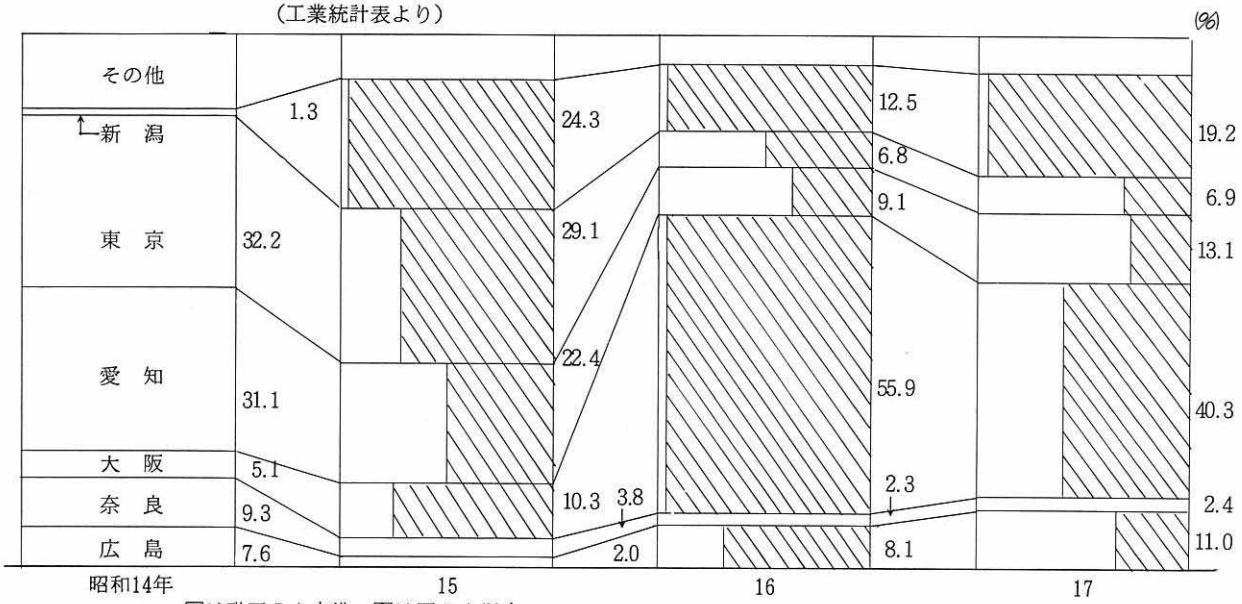


図12

毛　筆　生　産　量

（産地別構成）

（工業統計表より）



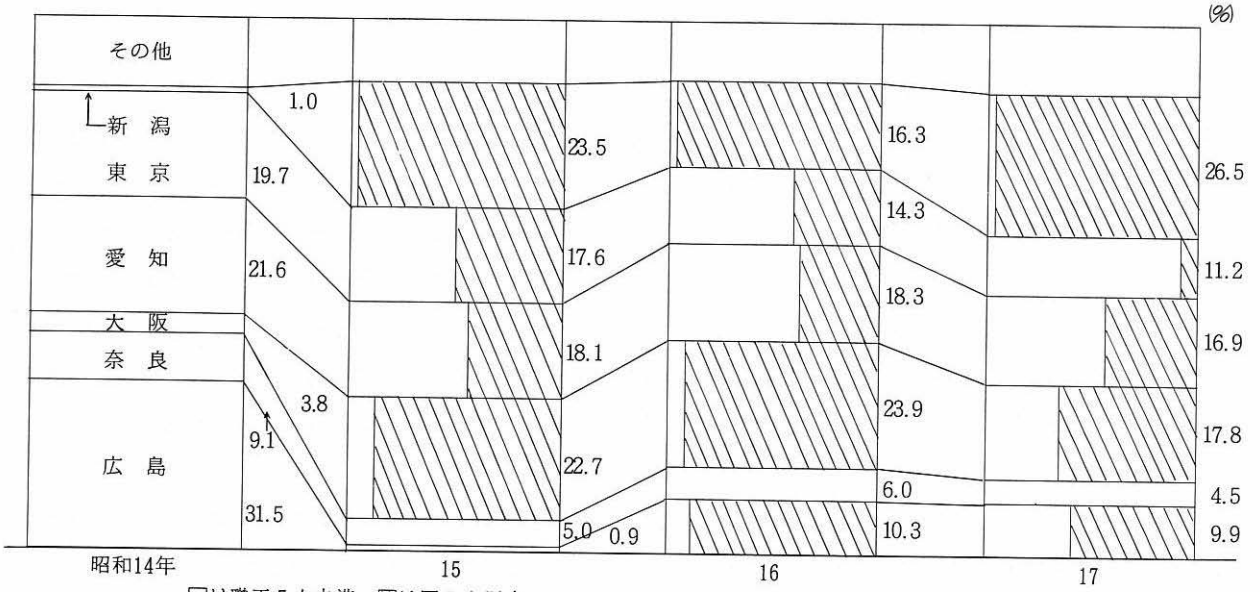
□は職工５人未満　▧は同５人以上

図13

毛　筆　生　産　額

（産地別構成）

（工業統計表より）



□は職工５人未満　▧は同５人以上。

れる。全体としては、この時期には、大阪、新潟、東京などで大量の筆の生産が行なわれており、戦後以降わが国の筆づくりの中心地となる愛知、広島、奈良などはむしろ比較的わずかであることが、注目されよう。また、後にわが国の毛筆の主要な産地となる愛知や奈良では、職工五人未満の事業者による生産の割合が、相対的に高いという傾向が認められる。

ちなみに、職工五人未満の事業者による毛筆生産についてのみの地域的分布をみると、図一四・一五のようになっている。この場合は、愛知、東京を中心にして、広島、奈良、大阪の他にも、新潟、宮城、静岡、京都などの各地でわずかずつでも生産の記録が残されている。この当時、毛筆の生産地は、全国的にかなり広範にみとめられたであろうことが、以上のことから明らかである。

各毛筆産地の生産額を生産量で割った平均単価を算出してみると、奈良、京都、宮城、静岡などは平均水準を上まわっている。愛知、新潟はほぼ同水準で、全国平均水準に位置している。それにたいして、広島は全国平均かややそれを下まわっている。とくに、奈良は平均単位が安定的に高水準にあるのにたいして、宮城、京都は年によって変動の振幅は大きい。大阪、東京は、年ごとの平均単価の大きな変動が目につく（図一六）。

図14

毛　筆　生　産　量（地域別構成）

（職工５人未満）　　（工業統計表より）　(%)

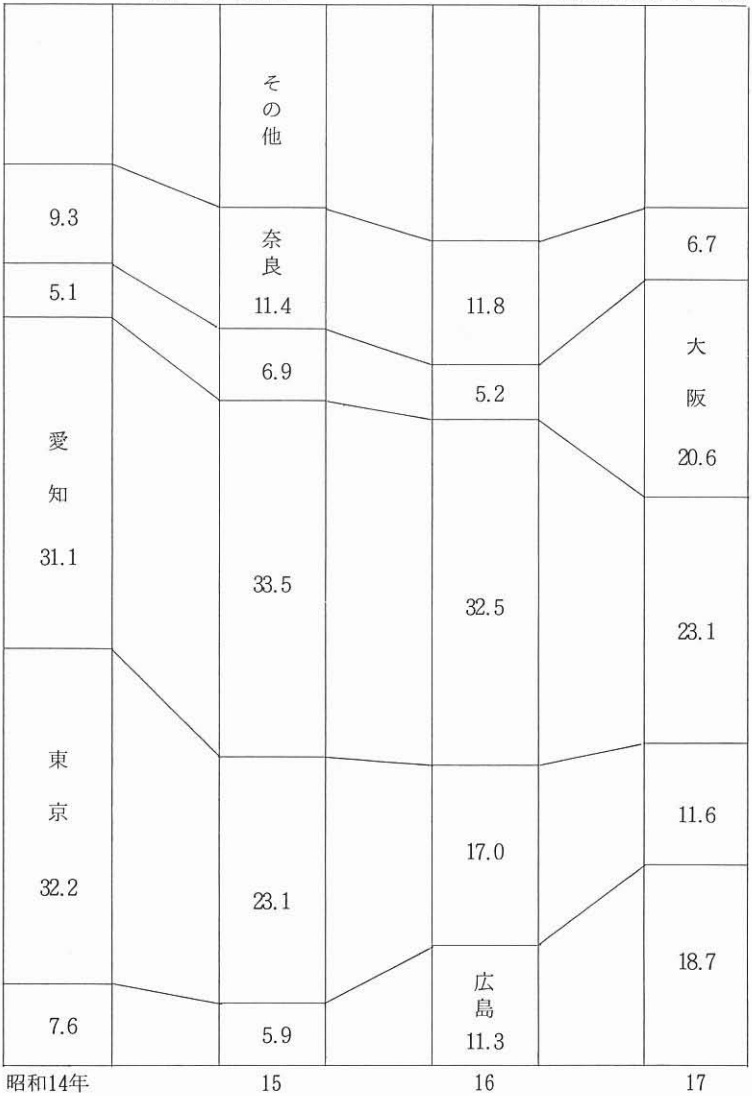


図15

毛　筆　生　産　額（地域別構成）

（職工５人未満）　　（工業統計表より）(%)

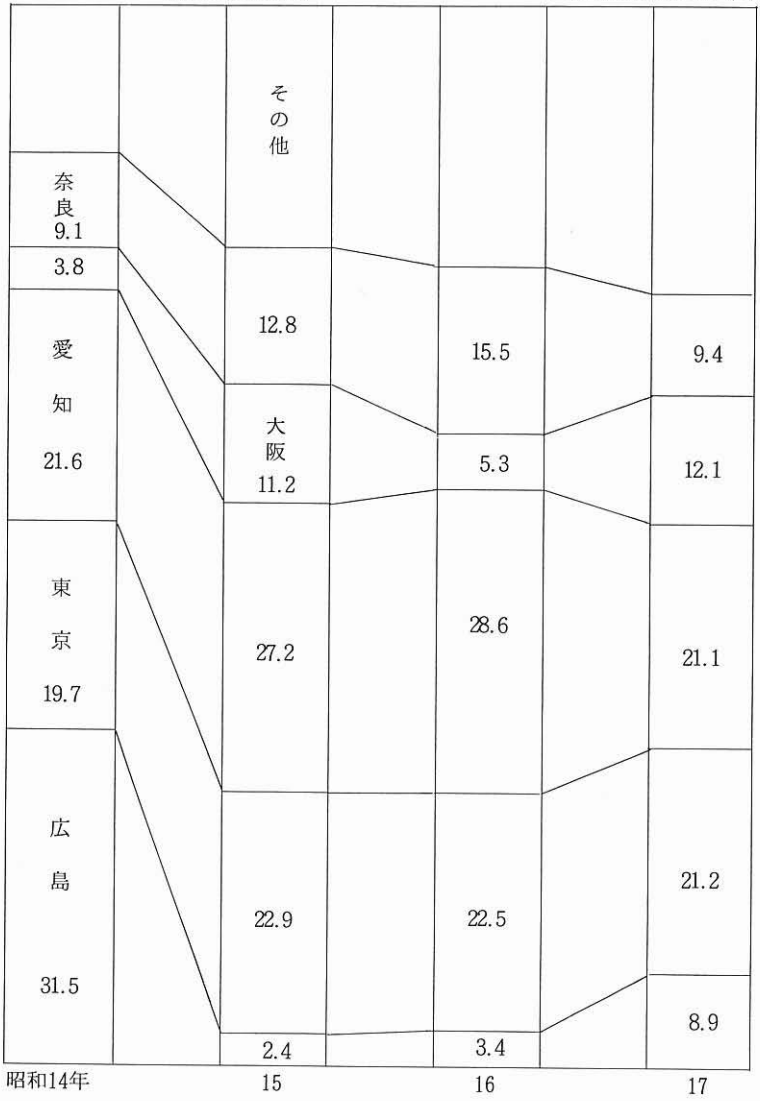
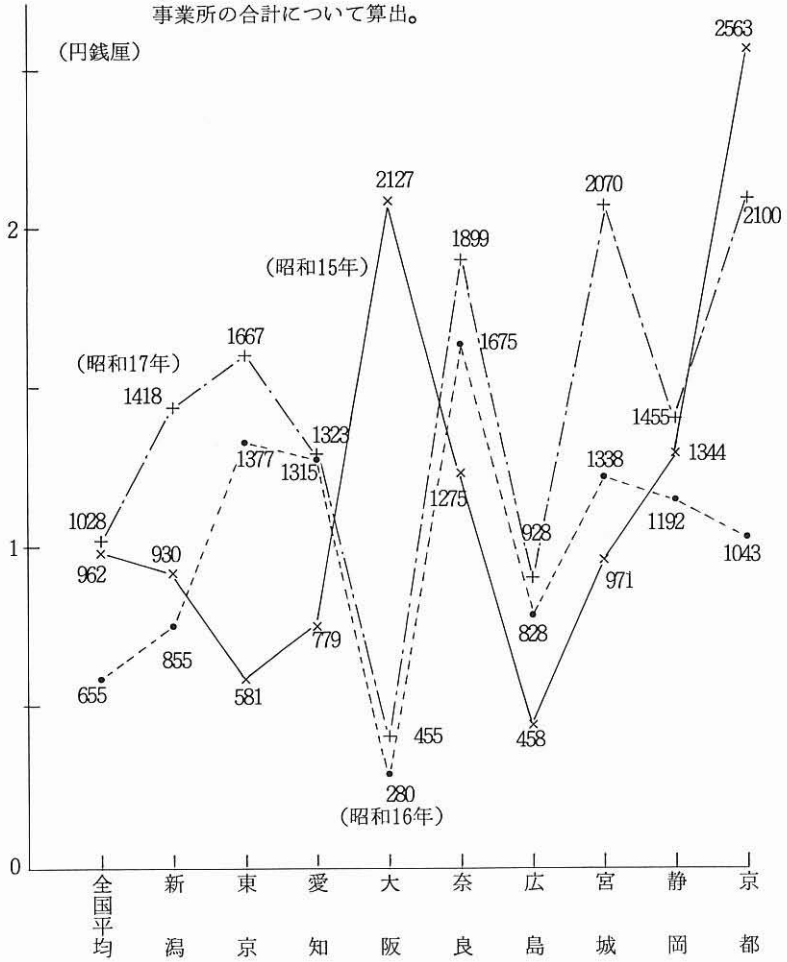


図16

毛筆の平均単価

（ダース当り）

工業統計表より。
職工５人未満、同５人以上の
事業所の合計について算出。



C　全国における筆の生産量の推移（戦後）

(1)　生産量の推移と地域的分布（戦後）

戦争直後から、毛筆の業界は未曽有の辛酸をなめる。国粋主義的イメージと結びついた毛筆習字は、教育の場から完全にその姿を消す。戦後の不景ムードの中で、一般的な毛筆の需要もまったく期待薄となり、各地の生産者は転廃業をせまられてゆく。

その後、戦後経済の復興と高度成長の過程にいたり、学校習字の復活もみられるようになる。奈良、広島、愛知が毛筆の中心的産地として定着してゆく一方、大阪、東京が毛筆生産を脱して、他への転廃業をつづける。また、新潟がその比重を落としてゆく中で、広島と愛知の比重の増大の傾向がはっきりしてくる。とくに、高度成長期における広島の比重の安定した増大傾向がめをひく。毛筆産地としての広島の戦後における地位は、この時期に定着していったことが知れる（図一七～一九）。

毛筆および絵画用品の出荷額の戦後における推移を、図二〇・二一からみてみると、昭和四一年までの順調な推移と、昭和四二年の落ち込み以降の急速な増大傾向が続く。

図17

毛筆の全国出荷額（戦後）

（工業統計表より）

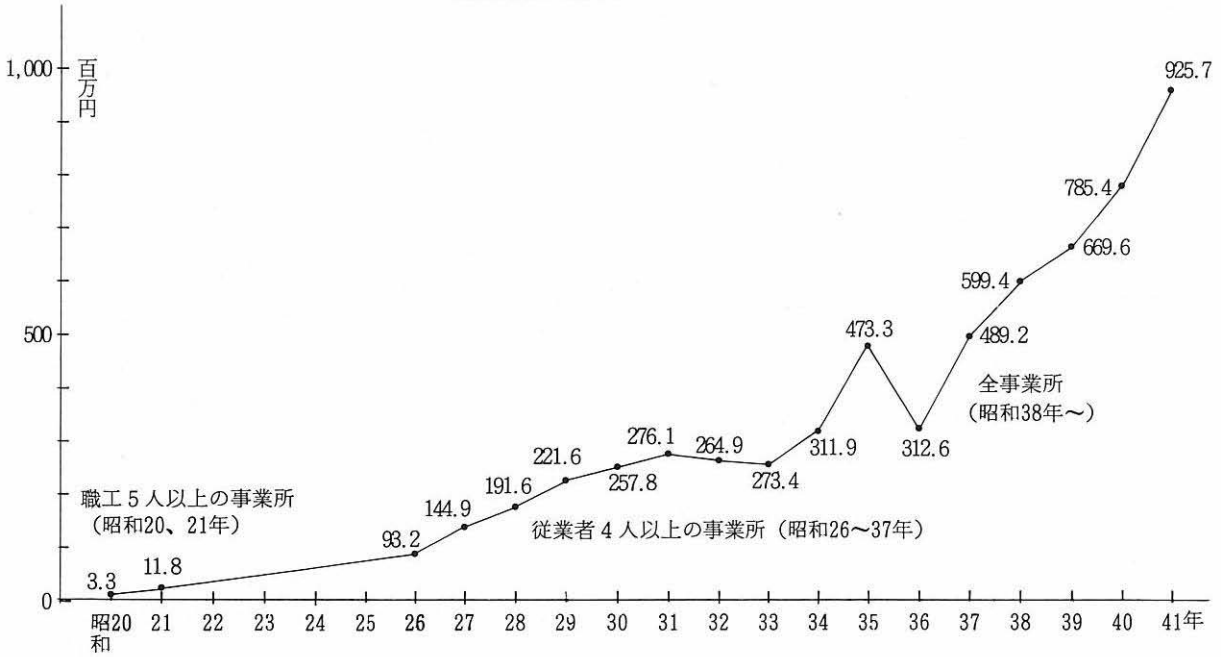


図18

毛　筆　生　産　額（産地別構成）

（工業統計表より）

昭和25年～　従業員４人以上

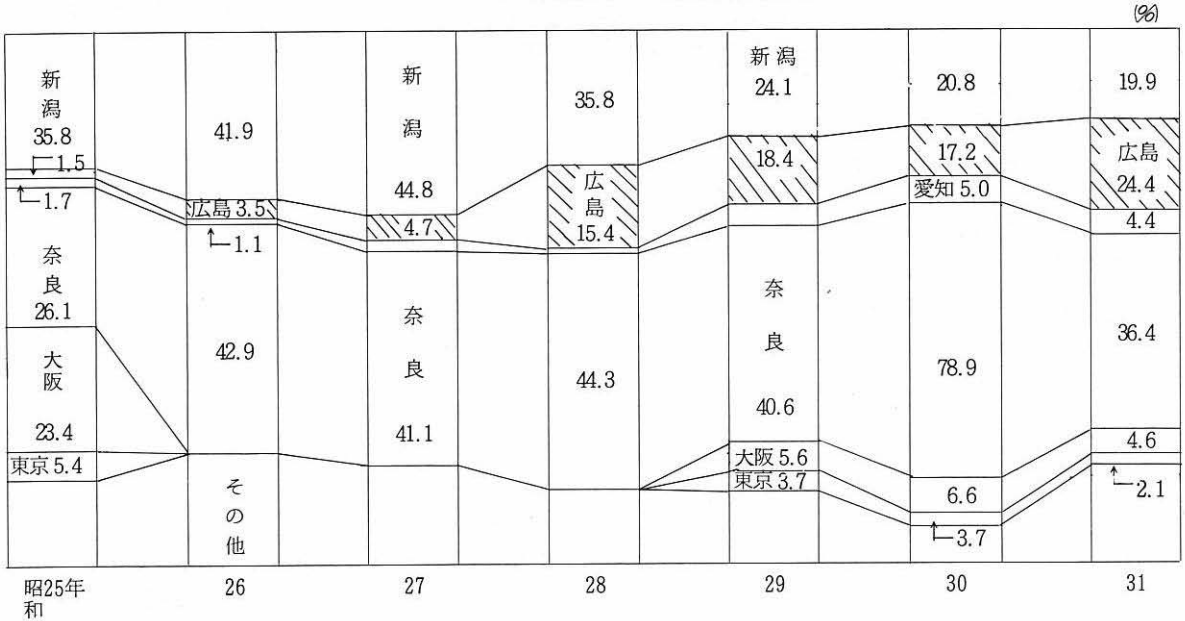
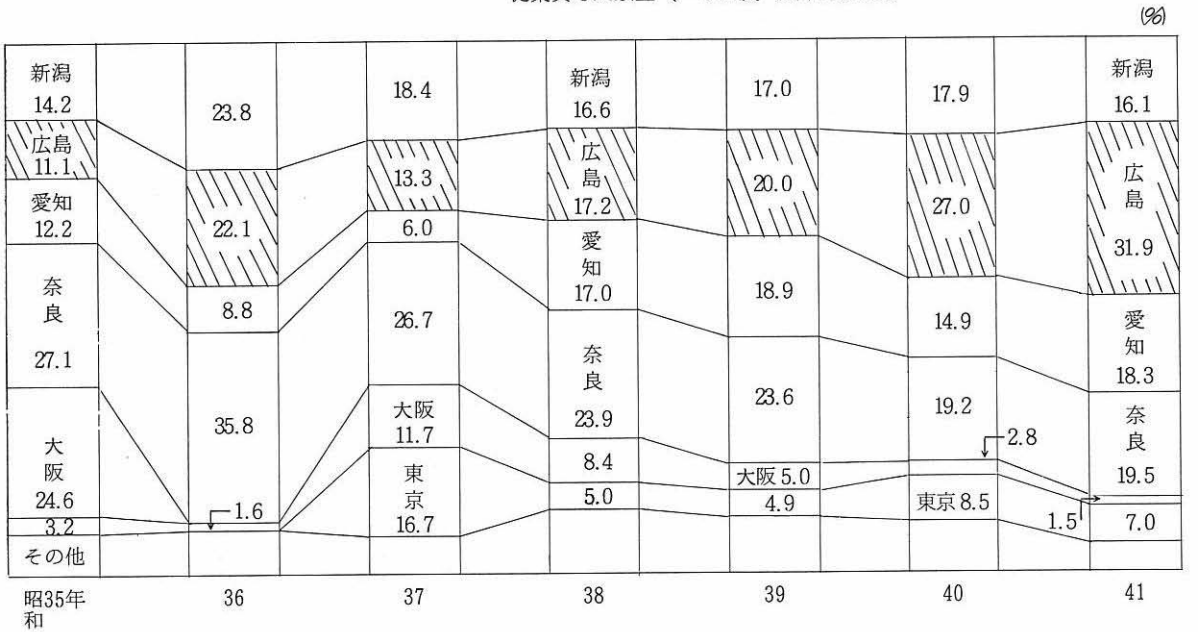


図19

毛　筆　生　産　額（産地別構成）

（工業統計表より）

従業員４人以上（～昭37）、以降全従業員



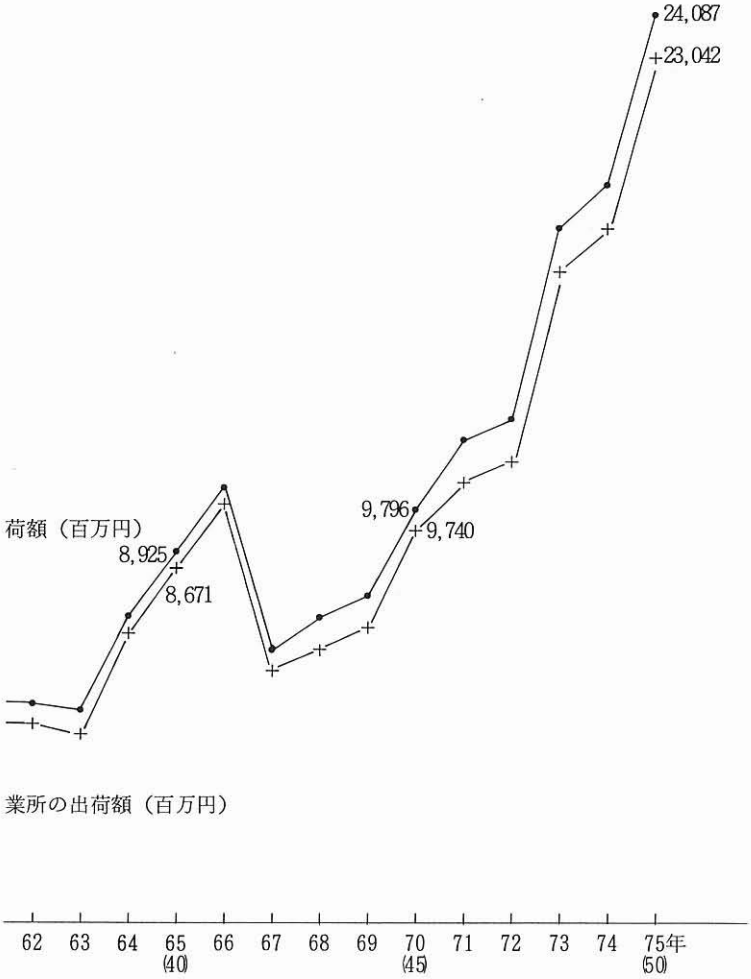

24,087
23,042
荷額（百万円）
8,925
8,671
9,796
9,740
業所の出荷額（百万円）
62
63
64
65
(40)
66
67
68
69
70
(45)
71
72
73
74
75年
(50)

図20

毛筆・絵画用品製造業の出荷額

『戦後の工業統計表』（産業編、第１巻、昭57）より

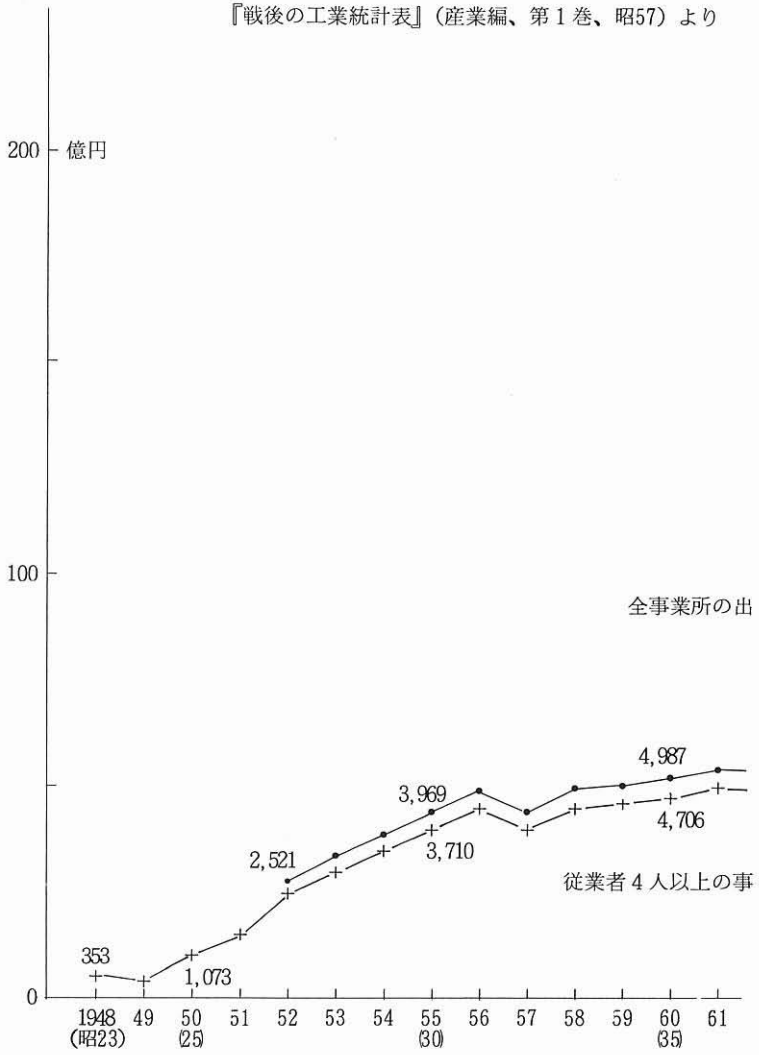
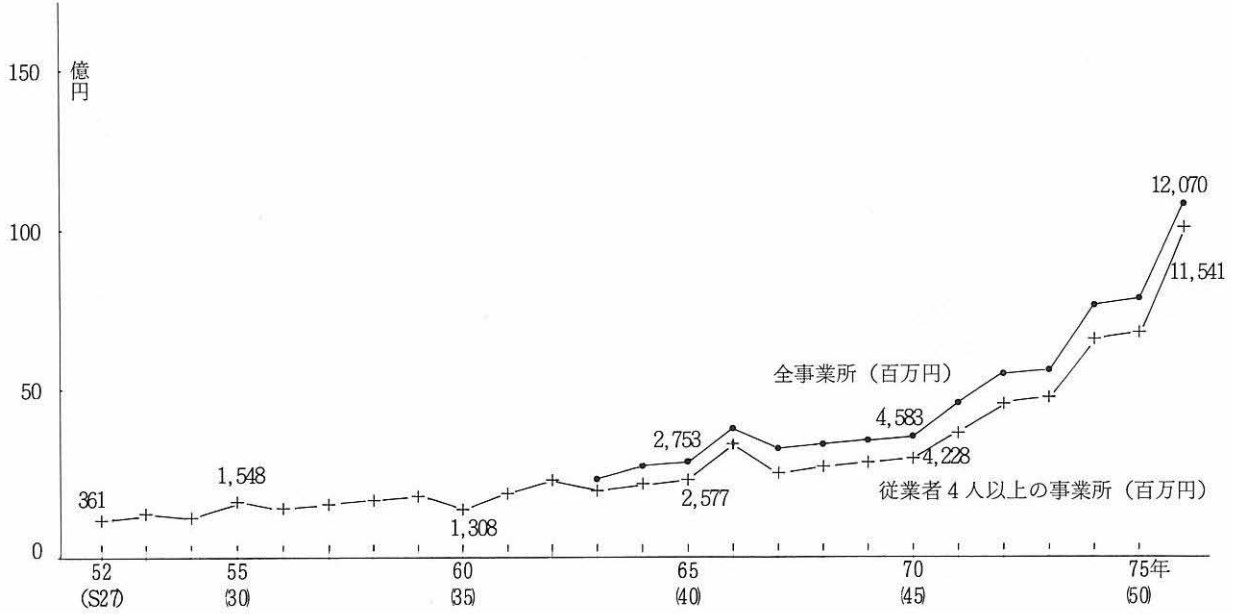


図21

毛筆・絵画用品製造業の付加価値額

『戦後の工業統計表』（産業編、第１巻、昭57）より



(2) 生産量の推移と地域的分布（現在）

毛筆の大部分は書道用の筆である。その他には、日本画用の画筆、化粧用紅筆、工芸・デザイン用の画相筆なども生産されている。わが国における毛筆生産量のおよそ半分は、学校用の教材である。毛筆の生産量は、近年、書道塾の隆盛や書道展の各地における開催などもしばしば行なわれる傾向にあるとはいえ、かっての高度成長期における伸長ぶりはもはやみられず、このところほぼ横ばいの状況にあるといってよいであろう。

国際的には、中国、台湾、朝鮮産の毛筆もみられ、わが国への輸入も増加しつつある。貿易摩擦の解消策としての輸入品拡大の気雲も国の内外で高まりつつある現在、毛筆の輸入は、ますます増大することが予想される。とくに、原材料としての上質の筆毛を産する中国では、単に原毛を輸出するだけでなく、完成品としての毛筆や半製品の形で、付加価値を増大させながら、とくにわが国への輸出攻勢を強めているといわれている。

昭和五四年におけるわが国の毛筆輸入は、一、二〇〇万本をこえ、過去五か年間で二倍化した。このうち、七割が中国、二割が台湾からのものである（通商産業省生活産業局『伝統的工芸品産業―その現状と施策―』(財)通商産業調査会、一九八一年、八一ページ）。金額的には、中国筆の輸入は六億円程度であり、最近では一〇～二〇億円にも達しているとの報告もみられる。豊富な原毛と安価な労働力を誇り、国の輸出促進策のもとで、中国筆は今後、ますますわが国の市場に進出し、製筆業界に多大の影響をおよぼすであろうといわれている。

わが国における現今の毛筆生産地は、伝統的工芸品産業の指定を受けている、熊野町（広島県）、豊橋市（愛知県）、奈良市の三大地域に代表される。全国的には、これらの地域の他に、川尻町（広島県）、見附市、長岡市（い

ずれも新潟県)、京都市他の数か所で若干の生産が行なわれている。

わが国における全国的な毛筆生産の状況は、必ずしもその詳細が明らかではない。きわめて零細な規模の家内工業製品であり、それぞれの生産地があちこちに分散した状態のなかで、その生産量や生産額を統一的にとらえることは、それほど容易ではないからである。現状では、各地の業界や業者が自主的に公表したものをあわせて、全国的な生産量を推定していく方法が多くとられているようである。

通産省の指導のもとに作成された「伝統的工芸品に関する振興計画」(昭和五四年)他によって、全国的な毛筆生産の状況をまとめてみたものが、表三である。ここに掲載されている以外の他の産地における生産量は、せいぜい数百万本、数億円の程度にとどまっているものと思われる。

全国的にみた毛筆製造業者は、現在、およそ四〇〇弱程度。事業規模は、大半が五人未満の家内工業であり、法人組織の形をとったものは、全事業者のおよそ二割程度にとどまっている。また、従業者の大半は、主婦等の女性労働に大きく依存しているのが、実情である。熊野、豊橋、奈良の指定を受けた三大産地では、製筆業者はおよそ三〇〇余(全体の約九割)、これに川尻を加えれば、三五〇〜三六〇程度とみなされよう。従事者は、大体三、〇〇〇〜四、〇〇〇人程度と思われるが、内職等の者を含めればもっと多くなるであろう。毛筆生産量は、近年、およそ五、〇〇〇〜六、〇〇〇万本、生産額は八〇〜九〇億円程度ということになるであろう。

熊野筆のしめる全国的位置は、事業所数で三割強、従事者数で約六割、生産量で六割強(書道用のみでは八割)、生産額では五割強といったところである。同じく川尻筆の場合は、事業所数で一割、従事者数二割強、生産量、生産額とも二割程度である。したがって、広島県内における毛筆生産の全国的比重は、事業所数で五割弱、従事

表3　現在の毛筆産地の全国的状況

	熊野筆	豊橋筆	奈良筆	(小計)	川尻筆	合計
(A) 事業所数	130 所 《36.2》	139 《38.7》	50 《13.9》	319 《88.9》	40 《11.1》	359 《100.0》
(B) 従事者数 (B/A)	(2,000 人 《61.7》 (15.3) 人	357 《11.0》 (2.5)	85 《2.6》 (1.7)	2,442 《75.3》 (7.6)	800 《24.7》 (20.0)	3,242 《100.0》 (9.0)
(C) 生産量 (C/A) (C/B)	3,820 万円 《67.9》 (29.3) 万本 (1.9) 万本	355 《6.3》 (2.5) (0.9)	154 《2.7》 (3.0) (1.8)	4,329 《76.9》 (13.5) (1.7)	1,300 《23.1》 (32.5) (1.6)	5,629 《100.0》 (15.6) (1.7)
うち(C′) 書道用 (C′/A) (C′/B)	2,540 万本 《86.7》 (19.5) 万本 (1.2) 万本	249 《8.5》 (1.7) (0.6)	139 《4.7》 (2.7) (1.6)	2,928 《100.0》 (9.1) (1.1)		
(D) 生産額 (D/A) (D/B) (D/C)	4,500 百万円 《54.6》 (3,461) 万円 (225) (117) 円	1,455 《17.7》 (1,046) (407) (409)	480 《5.8》 (960) (564) (311)	6,435 《78.1》 (2,017) (263) (148)	1,800 《21.9》 (4,500) (225) (138)	8,235 《100.0》 (2,293) (254) (146)

(資料)「伝統的工芸品に関する振興計画」(昭和54年度、通産省調)。但し、生産額は、松尾和幸編『文房四宝』松栄出版、昭和54年6月より。川尻筆(昭和55年調)は、川尻商工会「名産川尻筆」57年1月による。

業数で八割五分、生産量九割近く、生産額で七割五分近くということになり、広島県内とくに熊野町におけるその比重の大きさが、注目される。

しかし、その半面で、事業所当たり、従事者当たりの毛筆生産量および生産額を算出してみると、熊野筆は、他の地域に比較して、安価な筆を大量に産出していることが分かる。同じことは、川尻筆にもいえるようである。

ちなみに、平均単価（生産額／生産量）は、熊野筆一一七円、川尻筆一三八円にたいして、豊橋筆四〇九円、奈良筆三一一円となり、後者の方が三～四倍近く高い。このあたりにも、熊野筆が他産地の人びとから、「普及品」呼ばわりをされる理由があるのであろうか。しかし、全国生産量の圧倒的比重をしめている熊野筆の種類の多さを単純に平均化して、熊野筆の一般的な良し悪しを云々することはできない。熊野筆のうちにしめる高級品の割合は小さくとも、その絶対量、したがって全国の高級品の中にしめる熊野筆の割合は、必ずしも少ないとはいえないからである。

熊野筆組合調べによると熊野筆の全国シェアーの推移は、表四のようである。これは、おそらく生産量の全国シェアーであろう。熊野筆は、毛筆については全国生産の八割以上、画筆および化粧筆はそれぞれ七割程度で推移している。輸出については、画筆および化粧筆が大体六割のシェアーをしめている。

表 4

熊野筆の全国シェアーの推移

（熊野筆組合調）

	昭和49年	50	53	57	58
毛　　筆	90 %	90	80	80	80
画　　筆	70	70	70	65	70
（輸出）	（60）		（60）	（60）	（60）
化粧用筆	70		70	65	70
（輸出）	（72）		（60）	（60）	（60）